

初冬の虫たち

2020.11.27 自然解説員 神谷耀生



クロスジフユエダシャク

多くの昆虫は休眠に入る寒い冬。そんな時期に元気に飛び回る蛾たちがいます。その名もフユシャク。

フユシャクの仲間は春の終わりから夏の始めにかけていわゆるシャクトリムシとして過ごし、さなぎで夏をこし、秋の終わりから春の初めまでの寒い季節に様々な種類が活動します。

活動といってもほとんどのフユシャクの成虫には口がなくエサは食べません。幼虫時代にたくわえたエネルギーだけで活動するのです。

また、オスはふつうの蛾と同じく立派な翅があり飛び回ることができますが、メスの翅は退化して歩いて歩き回ることしかできません。これは翅を失くしたり小さくすることで厳しい寒さから身を守っているのではないとも言われています。そういえば哺乳類の世界でも寒い地方に住むホッキョクギツネは、暖かい地方に住むフェネックギツネなどと比べて耳が小さいですね。

クロスジフユエダシャクは全国的によく見られる種類で、雑木林を昼間に飛び回ります。草木の葉が枯れ落ちた冬の森で、小さな蛾たちが紙のような翅でひらひらまう様子は、まるで白昼夢のようです。



クヌギカメムシの仲間

昔の携帯電話のような、ちょっとおしゃれな色と形をしたカメムシ。冬が始まる前に成虫(親)は木の割れ目などに卵を産み付けて死んでしまうのですが、その子どもたちはまだ肌寒く、エサとなる木々の若葉が十分に芽吹いていない春先早い時期に卵からかえり、活動を始めます。それを可能にしているのが、親が残したお弁当。成虫は、卵を産み付けたあと、栄養満点のゼリー状の物質で卵をおおいつくします。ふ化した幼虫は、木々の若葉が芽吹くまでのあいだ、卵の周りに残されたゼリーを食べて過ごすことで、ライバルである他の種類のカメムシたちよりも一足先に成長することができるのです。

嫌われもののカメムシですが、くさいにおい以外にもこのように生き残るための作戦を持っていたりするから自然観察は面白くてやめられませんね。ちなみに、「クヌギカメムシの仲間」とした理由は、この仲間のカメムシにはよく似た種類が2種類ほどいて、お腹の裏側の色を見ないと見分けられないからです。撮影した時点では知るよしもありませんでしたが、生き物の種類を見分けるポイントは本当に思わぬ部分に隠れていたりするので、野外で虫を見つけてとっさに種類をズバリ言い当てられるようになるのには意外とお勉強が必要だったりします。私もまだまだ未熟者ですが、これからも精進したいものです。

作成：2020年12月 21世紀の森と広場 パークセンター